



文藝春秋本社

元新体操五輪選手

山崎浩子さん脱会を 背後で支援

「週刊文春」記者・石井謙一郎氏の素顔

9月8日号「週刊文春」に石井謙一郎氏の統一教会批判記事が載ったが、事実誤認が多い。彼は「ソウルの検察がその宣教会財団を捜査中だ」と述べている。しかし実際は、文春発売日の6日前（8月26日）に、ソウル地検は被疑者二名に不起訴の判断を下していた。彼は全くの誤報記事を書いたのである。このような手法は、今に始まったことではない。

「失敗したら大問題になる」

93年3月6日、元オリンピック選手の山崎浩子さんが失踪し話題となった。失踪中、どのメディアも彼女の消息をつかめなかったが、石井氏らは既にその動きを知っていたのである。

「私たちを除いて、マスコミには誰一人として、その地震（失踪事件）を予測できるものはいなかった。…（週刊文春の）松井デスクは…石井記者に重大な情報を打ち明けた。『…いよいよ妹（浩子）を説得するらしい』…失敗したら大問題になる」（有田芳生&「週刊文春」取材班編『脱会』212頁、教育史料出版会）。

失踪時を山崎さんは次のように振り返る。「なんでこんなこととする！…こんなの話し合いじゃない！」（『愛が偽りに終わるとき』184頁）と、激しく抵抗したという。意に反した強制的脱会説得、それが失踪の真相であった。

ある文春記者は「確率の低いバクチ」と述べている。有田氏も「説得に失敗したとき…キャンペーンを台無しにすることぐらい十分にわかっていた」という。なぜ、台無しだと恐れたのか？それは失敗すれば、強制的脱会説得の実態が白日のもとに晒されるからに他ならない。

しかし脱会説得が成功。石井氏らのもとに「待ちに待った情報」が届けられたのだという（『脱会』238頁）。石井氏らは「この1年は『お姫さま救出物語』そのもの…物語の終わりは、彼女の脱会でなければならなかった」（同216頁）と告白している。騒動は、当初より山崎脱会を目指し出発していたのである。ジャーナリストのモラルを完全に逸脱した行為である。

「脱会劇」で利益を得た石井氏と有田氏

山崎手記を独占掲載した「週刊文春」は売り上げを伸ばし、石井氏は記者の評価を高めた。有田氏もワイドショーに数多く出演。一人の女性の人権を踏み台に、彼らは名声を得た格好となった。

石井氏には、山崎脱会を背後で支援した過去がある。「月刊タイムズ」2010年4月号に石井氏がまとめた有田芳生氏、宮村峻氏らの対談記事が掲載されている。そこには「拉致監禁とか強制改宗が実際になされているのであれば、それはやはり許されない」（16頁）とある。石井氏は全くの偽善者と言わざるを得ない。